

令和 4 年 8 月 26 日現在

機関番号：32513

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K22025

研究課題名(和文) 第二次世界大戦後の中東欧における送還者・残留者の歴史研究：シレジアを中心に

研究課題名(英文) Historical Research on residents and forced migrants in Central and Eastern Europe after World War II: Focusing on Silesia

研究代表者

衣笠 太郎 (Kinugasa, Taro)

秀明大学・学校教師学部・助教

研究者番号：40888012

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、これまでドイツ史や東欧の国民史に分断されてきた第二次世界大戦末期から1970年代半ばにかけてのシレジア地域史を、「未完の戦争」テーゼに基づいて捉え直そうとするものである。令和2年には新型コロナウイルス感染症の世界的拡大、令和3年度においてはそれに加えてロシアによるウクライナ侵攻の影響もあり、ドイツ、ポーランド、ウクライナでの史料調査が全く行えない中での研究遂行となった。そうした中で、すでに入手していた史資料群の分析に力点を置くことで一定の進捗が見えたと言えるだろう。特に、1940年代後半におけるシレジアをめぐる強制移住の歴史的背景に関する分析に一定の成果が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2022年2月以来、ウクライナではロシアによる軍事侵攻を受けて大量の避難民や強制移住者が発生している。極めて悲惨な状況が発生しているとはいえ、こうした事態は中東欧においては歴史的に見て珍しいものではなかった。本研究は、そうした現代的でもあるテーマを、シュレージエンというドイツと中東欧の境界地域に位置していた地域の事例から歴史的に再検討することで、当時の実像を明らかにするとともに、現代の避難民・強制移住問題にも新たな視座や知見を与えるものである。

研究成果の概要(英文)：This study attempts to reconsider Silesian history from the end of World War II to the mid-1970s based on the "Unfinished War" thesis, which has been divided into German history or national history of Eastern European states.

The research was conducted in the situation in which no field work could be done in Germany, Poland and Ukraine, due to the pandemic of Covid-19 in 2020 and the Russian invasion to Ukraine in 2021. Under these circumstances, we were able to make a certain progress by focusing on the analysis of historical materials that we had already obtained in Europe. In particular, we made some progress in analyzing the historical background of forced migrations in Silesia in the late 1940s.

研究分野：ヨーロッパ近現代史

キーワード：ドイツ人の追放 中東欧 ドイツ ポーランド 境界地域 現代史 人の移動

1. 研究開始当初の背景

しばしば第一次世界大戦は「未完の戦争」と呼ばれる。この用語はすなわち、その戦争から生み出された諸問題が1918年11月の休戦協定締結や翌年6月のヴェルサイユ条約の調印を経て、もなお、様々な諸相において継承されていたことを意味するテーゼを含意する。特にシレジア（ドイツ名シュレージエン、ポーランド名シロンスク）を含むドイツ帝国東部地域（以下、旧ドイツ東部領土）においては、その地域住民の言語的・民族的境界線の曖昧さに起因して、1918年以後から20世紀後半に及ぶまでの非常に長期にわたる困難な国境線画定と民族帰属決定の作業が継続されていくこととなるのである。しかしながら、この地域をめぐる、20世紀半ば頃までのドイツ史学では極めて自国中心主義的な歴史学研究が行われ、それに端を発する認識が一般国民にも浸透していた。戦後においてはこのような歴史認識は厳しく批判されていくものの、現在に至るまでその十分な克服には至っていない。

着想に至った経緯 申請者は一貫してシレジアを中心とした旧ドイツ＝現ポーランド領の近現代史研究に従事し、これまで主に地方の視点から、中・東ヨーロッパにおける地域住民のアイデンティティの実態を史料より跡付ける研究を積み重ねてきた。その中で、2016年と2018年の二度にわたって「国際移動セミナー」（東京外国語大学とポーランド・クラクフ国際文化センターの共催）というプログラムの枠内で「境界地域の共有遺産」をテーマとした調査・研究活動に参加する機会を得られた。とりわけ2016年夏に実施された同セミナーの対象地域が、本研究で問題となっているシレジアであったことが今回の研究の着想にとって重要であった。このセミナーでは、シレジアにおいて歴史的に重要とされる都市・地点を50か所ほど回ったのであるが、その多くの地点で、「ドイツ人の追放」や旧ポーランド東部領土からの住民移動についての解説および展示があった。とりわけ、ドイツ人の追放については以前から研究対象としていただけに、一方の旧ポーランド東部領土からの移住者について日本においてはほとんど知られていないという事実に気付き、本研究を構想し始めた。

また、従来のシュレージエン地域史研究は地域内部の政治・社会を分析したものがほとんどであり、その他の世界史的展開と結びつけながら検討するという観点が見られなかった【Norbert Conrads (Hg.), *Deutsche Geschichte im Osten Europas. Schlesien*, 1994; Marek Czapliński (red.), *Historia Śląska*, 2007】。しかし近年は「世界」との関係性の中で構築される「地域」というものに着目した視角が提唱されている【羽田正『地域史と世界史』、2016年】。本研究は、第一義的には、戦後のヨーロッパ国際関係や政治力学、特に冷戦という構図の中で2つの研究対象による「シレジア」という地域についての認識がどのように形成され変容していくのかという点を明らかにする点で、この新たな地域史研究のなかに位置づけられるだろう。このように、こうした近年の地域史をめぐる研究状況を踏まえる中で、この研究はより具体的に構想されていた側面がある。

2. 研究の目的

研究目的・研究対象 本研究の目的は、これまでドイツ史や東欧史の国民史に分断されてきた第二次世界大戦末期から1970年代半ばにかけてのシレジア地域史を、「未完の戦争」テーゼに基づいて捉え直すことである。具体的には、第二次世界大戦後にシレジアへ移住、もしくはそこに残留させられた人々の体験を再構築することを目指す。

申請者は、中東欧の民族混住性に起因する第一次世界大戦の「未完」性は第二次世界大戦末期以後に一つの歴史的転換点を迎えると考え、その代表例として「ドイツ人の追放」と呼ばれる出来事が挙げられる。大戦末期の中東欧ではナチ・ドイツの支配下に置かれていた地域がソ連軍によって次々と占領されていくが、その後の戦後処理の過程で旧ドイツ東部領土はポーランドもしくはソ連の領土となった。この文脈において、この地域からは1500万人とも言われるドイツ系住民が避難と「追放」の憂き目に遭った。彼ら被追放民の戦後史については、最近川喜田敦子による包括的研究が出され、ドイツ人「追放」の構想・執行・ドイツ社会への統合・記憶の形成という四局面からの詳細な分析がなされている【『東欧からのドイツ人の「追放」』、2019年】。

独自性：地域史から見る住民移動 しかしながら、「ドイツ人の追放」はあくまでもドイツ史の立場から浮かび上がってくるものである。この時期の住民移動をシレジアという地域を介して見ると、全く別の歴史像が見えてくる。ドイツ系住民の追放によって開けられた空隙は、旧ポーランド東部領土（現在のウクライナやベラルーシ）から、やはり強制的に移住させられたポーランド系住民によって埋め合わせられることとなったのである。すなわち、「ドイツ人の追放」はそれ単独で起こったものではなく、戦後ポーランド国境の西方移動という条件のもと、東方からのポーランド系住民の強制移住とセットで実施された政策であると言える。しかしこうした中東欧を広く視野に入れた、複数の民族カテゴリーの強制移住に関する実証研究は、既に述べたように旧ドイツ東部領土史が国民史に基づいて分断されてきたという事情もあり、ほとんど進展していない。

3. 研究の方法

研究対象 本研究の研究対象は「送還者」および「残留者」と呼ばれる人々に大別される。「送還者」とは、第二次世界大戦直後に旧ポーランド東部領土からシレジアなどへ移住してきた人々を意味する用語である。加えて本研究では「残留者」も重要な分析対象となる。確かに当該地域では住民の大半が移住させられたのであるが、それでも 150 万人ほどの残留者も存在した。彼らは「ポーランド系」と認定されたり、経済的な理由から残留を命じられたりしただけでなく、言語境界地域であることに由来する民族的分類の困難さからも残留させられた。ここでは、これらの複数の国家や国民概念を越境した人々の記録から、住民移動および残留措置の経過、およびその後の体験や記憶を再構築することが目指される。これは国民史ではなく、中東欧の民族混住を前提とした「未完の戦争」テーゼに連なるものである。

研究方法 本研究は上記 2 つのカテゴリーからそれぞれ豊富な個人史料や日記・回想録・自伝を残しており、かつ戦後の中東欧の歴史的展開にとって重要であったと考えられる人物を抽出し、歴史的背景を踏まえつつそれらの史料を分析していくという手法をとる。このように個人の主観的記録を分析するため、「自分史 = エゴドキュメント」の手法が参考になると考えられる。「自分史」とは、ある個人が自分自身やその体験について語った史料から、ミクロな歴史を再構築していくこととする手続きを指す【榎原茂編『個人の語りひろく歴史』、2014 年】。具体的な抽出対象は、以下の二者である。

・「送還者」: アントーニ・クノート (Antoni Knot, 1904-1982)。旧ポーランド領ルヴフ (現ウクライナ領リヴィウ) 出身の研究者。戦後の送還政策によって、シレジアへと移住した。1945 年 9 月よりクノートはヴロツワフ大学図書館の所長を務めるなど、彼は戦後ポーランド学术界において重要な役割を果たした。彼に関する個人史料は、オソリネウム付属図書館、ヴロツワフ大学図書館、ヴロツワフ県立文書館 (以上、在ポーランド)、リヴィウ州立文書館 (在ウクライナ) などに所蔵されており、これらを収集・分析する予定であった。

・「残留者」: カジミエシュ・クッツ (Kazimierz Kutz, 1929-2018)。ポーランド領シロンスク県 (旧ドイツ領オーバーシュレージエン州) のカトヴィツェ出身の映画監督。1970 年の『黒い大地の塩 *Sól ziemi czarnej*』に始まる「シレジア三部作」は、シレジア地域主義を代表する作品と位置づけられている。彼に関する個人史料は、ポーランド現代文書館、シロンスク図書館、カトヴィツェ県立文書館、ポーランド国立文書館 (以上、在ポーランド) ドイツ連邦文書館に所蔵されており、同様に収集・分析する予定であった。

4. 研究成果

令和 2 年には新型コロナ新型コロナウイルス感染症の世界的拡大、令和 3 年度においてはそれに加えてロシアによるウクライナ侵攻の影響もあり、ドイツ、ポーランド、ウクライナでの史料調査が全く行えない中での研究遂行となった。そのうえでの研究成果は以下の通りである。

(1) すでに入手していた史資料を用いて、1940 年代後半のシレジア地域を介した強制移住の歴史的背景および強制移住の展開を分析した。ドイツ側については刊行史料集 (*Dokumentation der Vertreibung der Deutschen aus Ost-Mitteleuropa. In Verbindung mit WernervConze / Adolf Diestelkamp/Rudolf Laun/Peter Rassow / Hans Rothfels, bearbeitet von Theodor Schieder. Hg. vom Bundesministerium für Vertriebene, Flüchtlinge und Kriegsgeschädigte, Bonn 1953-1960*) や文書館史料 (ケーニヒスヴィンターの Haus Schlesien で入手した史料群) や、ポーランド側については刊行史料集 (Wojciech Wrzesiński (red.), *W stronę Odry i Bałtyku. Wybór źródeł (1975-1950)*, Wrocław-Warszawa 1990) を中心的な史料とした。現時点では暫定的な成果ではあるが、1940 年代後半のシレジア地域をめぐる強制移住の論理と構造を明らかにすることができている。最終的な成果については、来年度を目途に論文化することを目標としている。

(2) 本研究との関連性が密である広く近現代もしくは 20 世紀のシュレージエン地域についての考察を深めるうえで重要な論点についての成果をすでに発表、もしくは発表する予定である。第一に、論集である岩井淳・竹澤祐丈編『ヨーロッパ複合国家論の可能性 歴史学と思想史の対話』が 2021 年 5 月に出版された。報告者は、この論集の第 4 章「複合国家の近現代 シュレージエン/シロンスク/スレスコの歴史的経験から」を担当している。第二に、中欧・東欧文化事典編集委員会 (編集) 『中欧・東欧文化事典』が 2021 年 9 月に出版された。報告者は「シュレージエン、グダンスク ドイツ領ポーランド」という項目を担当しており、当該項目は広く旧ドイツ東部領土の歴史を概観するものである。第三に、『移民研究年報』(第 28 号、2022 年 6 月刊行予定) に「オーバーシュレージエン自由国 第一次世界大戦直後のドイツ = 中東欧境界地域における独立国家構想」という論文が掲載されることが決定された。

第四に、2020 年 11 月に日本ピューリタニズム学会の研究会において、研究発表を実施した。これは「第一次世界大戦後のオーバーシュレージエン/グルニィシロンスクにおける分離主義運動 カトリック人民党 (中央党) との関係を中心に」と題された報告で、本研究の分析対象地域であるシレジアについて、第二次世界大戦期から戦後期の前提となる戦間期に焦点を当て、その住民たちの集団的な帰属意識を明らかにしようとしたものである。第五に、2022 年年 1 月 6 日にハプスブルク史研究会において、「旧ドイツ領全史の舞台裏」という研究発表を行った。

『旧ドイツ領全史』は、報告者が2020年に出版した単著であり、その記述の一部は本研究のテーマである「シレジアにおける人の移動や残留」に割かれているなど関連が強い。そこでの議論を踏まえて、今後の研究活動を改めて構想し、修正していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 衣笠太郎
2. 発表標題 第一次世界大戦後のオーバーシュレージエン/グルヌイシロンスクにおける分離主義運動 カトリック人民党（中央党）との関係を中心に
3. 学会等名 日本ピューリタニズム学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 衣笠太郎
2. 発表標題 旧ドイツ領全史の舞台裏
3. 学会等名 ハプスブルク史研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 岩井淳・竹澤祐丈	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 356
3. 書名 ヨーロッパ複合国家論の可能性 歴史学と思想史の対話	

1. 著者名 羽場久美子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善	5. 総ページ数 不明
3. 書名 中欧・東欧文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------